

週刊プレイボーイ連載

「追及！ 耐震偽装事件の真実」第3回
『国交省の責任』を追及したためにヒューザーを倒産させられた」

ルポライター・明石昇二郎

&ルポルタージュ研究所

（『週刊プレイボーイ』2011年5月2日号）

的外れの、責任追及ショー”

今から5年ほど前、2005年11月に発覚した「耐震偽装マンション・ホテル」事件――。あの時、事件に絡んで名の挙げた人々は順繰りに国会に呼ばれ、「参考人招致」や「証人喚問」の名目の下、晒しモノの刑に処された。国会で繰り広げられた「偽装の首謀者探し」の様子は、テレビや新聞を通じて次々と茶の間に届く。世論の大半は、事件が「**組織犯罪**」だと頑なに信じていた。

が、これまで当連載で検証してきたとおり、耐震偽装事件の真相は一級建築士・姉齒秀次氏あねはひでつぐによる「**単独犯罪**」だった。国会は、他人に責任をなすりつけるべく姉齒氏がついたウソを見破れず、的外れな「責任追及ショー」を繰り広げただけに終わる。

つまり、国会は混乱を助長しただけだった。

*

そんな「国会ショー」の幕が開く直前の05年11月24日、国土交通省は姉齒氏を呼び、聴聞会を開いていた。彼の建築士免許を取り消すことを前提としたものだ。非公開だったにもかかわらず、その日の聴聞の様相を詳細に伝えている記事がある。

《姉齒建築士は11月24日、国交省での聴聞で**木村建設**、**ヒューザー**、**シノケン**（**福岡市**）の**3社の名を挙げて**圧

力を受けたと指摘した。木村建設の篠塚元支店長について「鉄筋を減らせと言われ、『安全性に問題が生じる』と答えましたが、『できなければ他の業者に代える』と言われました」と具体的に語っている》（『朝日新聞』05年12月7日付朝刊。ゴチックは筆者）
記者がさもその場において話を聞いていたかのような記述だが、実際は国交省からのリークによって書かれた記事だ。この記事は、国交省もまた「**組織犯罪**」だと考えていたという証拠に他ならない。

だが、06年1月下旬、民主党議員が国会質問のため、聴聞会の記録を開示するよう国交省に請求した際、同省はこれを拒否する。当時の『読売新聞』は次のように報じている。

「国交省は、（1）行政機関個人情報保護法8条は利用目的外での個人情報利用・提供を禁じており、姉齒元建築士もすべての公表を望んでいない（2）聴聞は原則非公開の手続き――などとして拒否した」（『読売新聞』06年2月3日付朝刊）

つまり、聴聞の記録は姉齒氏の「個人情報にあたる」というわけだ。

ならばなぜ、国交省は朝日新聞記者にはリークしたのか？ そもそもリーク行為は国家公務員法100条に触れる犯罪（職務上知り得た秘密を外部に漏らす守秘義務違反）ではないのか？

姉齒氏のウソを流布した国交省

そこで、耐震偽装問題を所管していた国交省住宅局の建築指導課に訊いた。お相手は、同課の淡野博久・企画専門官。取材の冒頭に淡野氏から、聴聞会当日に報道各社に配られたという「概要」を渡される。

*

「姉齒建築士には、詳細は公表しないが概要は対外的に説明することを伝え、

了解を得たうえで聴聞を始めました。

「一番ご関心があるのはアンダーラインを引いたところかと思えますけど」

「これ以上の内容はマスコミの記者にも公表してないんですか？」

「はい、この内容で取材の方たちには説明していません」

「朝日の記事では『木村建設、ヒューザー、シノケン（福岡市）の3社の名を挙げて圧力を受けたと指摘した』と書かれています。でも、この『概要』に社名は書かれていませんね。」

「ええ、そういう説明はウチからはしていません」

「朝日の記者は想像で書いたというんですか？」

「いや、新聞社の記事にそういうのはたくさんありますよ」

「は？」

「新聞社の記事にそういうのはたくさんありますから。数字が間違えていることだってけっこうありますから。3社の具体名とかは一切話していません。当時、記事をお書きになった方の総合的な取材の結果でお書きになっていると思います」

「国交省からの情報提供がなければ、ここまで具体的に踏み込んで書けません。」

「それは朝日さんに確認していただければいいんです。ウチからの説明では一切こういうことは言っていないよ」

*

姉齒氏が単独犯罪だったことを認めたのは、06年9月の初公判でのこと。生ぬるい国交省の聴聞ではウソを突き通した姉齒氏も、刑事や検事の取り調べにビビって音を上げたのだろう。

問題は、国交省が姉齒証言の真偽を検証しないまま報道機関に広報したことである。この後、警察は別件逮捕を乱発したのだ。ウソツキの片棒を担いだ国交省の罪は重い。筆者は国交省に「詳細」を公表するよう要求した。

が、国交省は頑なに拒んだ。姉齒氏に「詳細は公表しない」と説明したうえで聴聞したからなのだという。淡野企画専門官は語る。

「聴聞の目的は、処分のために必要な申し開きをしていただくことなので、事件の構図の解明が目的ではないんですよ」

「つまり、姉齒氏がウソを言おうが本当のことを言おうが、それは国交省の与り知らぬことだど？」

「事実関係の検証が聴聞会の目的ではないですから」

国交省にとっては、耐震偽装事件の真相を解明し、国民の安全を守ることよりも、姉齒氏の建築士資格剥奪のほうが大事なことだったらしい。

当時の国交省住宅局長を直撃！

耐震偽装事件が発覚した時の国交省住宅局長は、山本繁太郎氏だ。彼は現在、国交省を勇退し、次期国政選挙に自民党から出馬予定の政治家に転身していた。筆者は、山本氏の地盤である山口県柳井市へと飛んだ。

そこで筆者は山本元局長の目前に、一冊の本を差し出す。本のタイトルは『国家の偽装』これでも小嶋進は有罪か』（講談社刊）。小嶋氏の友人だったことで事件に巻き込まれ、大田区議会議員を辞職していた有川靖夫氏の著書だ。本を手に取りながら、それまで柔和だった山本氏の顔つきが突如、険しくなる。筆者は山本元局長に、小嶋氏の逮捕・勾留は冤罪ではないかと疑っていることを伝えた。

山本氏は、早口で語り始めた。

「そういう観点からの取材ということはおそらくわかりました。白か黒かを最要するに小嶋さんは、白か黒かを最

最終的に判断するのは『建築確認』であり、建築確認検査機関を指定した（国交省の）大臣に責任があると誤解しておられた。だけど、法律における最終責任者は建築主であり、ヒューザーの小嶋さんが最終責任者なんです。自分が選んだ建築士が自分を騙したとしても、建築確認をしたお前（＝国交省）の責任だ、という話にはならないんです」

——でも、山本さんの部下だった建築指導課長は、小嶋さんに対して「国の責任」であることを認めていたようですし、「国にも責任があるなら建て直すのを助けてほしい」と、小嶋さんは国に低利融資を要望していたそうじゃないですか。それがかなわないなら国家賠償請求の裁判を起こすと、当時の小嶋さんは考えていたそうです。

「残念ながら小嶋さんは、建築主の責任を負い切れなかったから、会社（ヒューザー）がツブれたんです」

と言った後に、山本氏は衝撃的な事実を明かした。

「実は、建築確認が通ったヤツで違法な建築物になってしまったケースが**すごくたくさんある**んですよ。故意ではなく**懈怠**（かいたい）（怠慢して責任を果たしていないこと）で。そうした判例もすごくあるんですよ」

どうやら国交省では、違法な建築物が建ってしまうことなど、「いつものよくある話」であり、建築確認が有名無実化している実態もしっかりと把握していたようだ。

その証拠に、イーホームズの藤田社長が耐震偽装の発覚を国交省に電子メールで通報した際、担当は、「本件につきましては、当方（＝国交省）に対して特にご報告いただく必要はございません」

と、大変ツレない返事をしている。

藤田氏の著書『完全版 月に響く笛』（講談社）の中で藤田氏は、この返事

を受け取った際の心境を次のように書いている（カッコ内は筆者）。

「なぜここで（国交省は）突き放したのか考えざるをえなかった。『建築主、ヒューザーとの間で問題を黙殺せよ』という意味だったのか。それが、このメールの合理的な解かいかもしれない。今となって思えば、そう考えるべきだろう。隠蔽せよという意味であり、指示だったのだ」

だが、その読みはまったく的外れだった。

国交省にしてみれば、姉齒氏の偽装の仕方と偽装が発覚した建物の数が前代未聞だっただけで、基本的には「いつものよくある話」のひとつに過ぎなかった。イーホームズ同様、姉齒氏の耐震偽装を見逃していた日本ERIや神奈川県藤沢市などの「検査機関」は、「その後の対処を誤らなかつた」ため、今も健在である。

そう、藤田氏は「耐震偽装を おおよけ 公にする」だけならまだしも、**国の建築確認制度が有名無実化している実態まで公にする**という「誤った対処」をしたために、潰されてしまったのだ。

そしてそれは、ヒューザーの小嶋社長にしても同様だった。彼も対処の仕方を誤り、国交省に「国の責任」を認めるようケンカを売ってしまったのだ。

昨年末、小嶋氏を初めて取材した際、彼はこう語っていた。

「僕はウチのマンションを買ってくれたお客さんを守ろうと思ひ、いきり立ったんですが、守りきれなかった……。僕を信用してくれたお客さんを裏切ってしまった。多大な二重ローンを組ませて、本当につらい思いをさせてしまっています。短絡的に僕が国交省に責任を認めるよう要求したことが、反省点です。国に対して正義感を求めたのが稚拙だった。バカだった。本当に反省しなければならぬ」

姉齒氏の耐震偽装発覚によって破産に追い込まれたマンション販売会社はヒューザーだけである。「国の責任」を追究しようなどと思わなければ、今なおヒューザーは存続していた可能性さえある。

しかし：藤田氏や小嶋氏が取った行動は、会社を潰さなければならぬほど、悪いことや間違ったことなのだろうか？ 国交省が何の責任も問われないままでもいいのだろうか？

とにかく、小嶋氏は国交省の責任追及に失敗した。その小嶋氏に、次の災難が降りかかる。自身の「逮捕」だ。

最終回の次週は、小嶋氏逮捕の理由とされた「詐欺」の検証と、マスコミの犯した「罪」にメスを入れる。

(次号、完結)

配信元：ルポルタージュ研究所

Copyright (C) 明石昇二郎

URL : <http://www.rupoken.jp>